

センター通信

(第49号)

責任編集：稲村哲也 呉咏梅 郵便番号：100081 Tel:8424893 1995.11.30

ニュース

◇10月6日(金)午前：「孫平化文庫」のテープカット式が当センター二階の図書資料室にて盛大に行われた。王福祥学長、厳安生主任が式を主催し、中日友好協会会長孫平化先生、国家教育委員会、中日友好協会、在北京日本大使館、国際交流基金北京事務所の代表、報道機関からの来賓がこの式に参加した。

◇10月7日(土)：北京外国語大学外事処主催の秋の日帰り旅行が催された。センターの派遣教授及び家族7人が「好漢」となり、万里の長城を登り、神路、十三陵(定陵)を一周した。

◇10月9日(月)－13日(金)：北京日本学研究中心成立十周年記念国際シンポジウムが盛大に開催された。特別講演、パネル・ディスカッションに参加する10名の中国、日本、アメリカの学者のほか、中国全土の各地から34名の分科会代表、国家教育委員会、国際交流基金、中日二十一世紀委員会、中国対外友好協会、在北京日本大使館、北京外国語大学の関係者、日本からいらした自費参加の先生方、そして専家の先生、センター卒業生、学生などあわせて約150人がこのシンポジウムに参加した。

◇10月30日(月)9：00：北京日本学研究中心第6次運営審議委員会が北京外国語大学事務ビルの3階会議室にて開かれた。会議に出席したのは、王仲達中国国家教育委員会外事司副司長、上田孝国際交流基金日本研究部部長、橋本逸男在北京日本大使館公使、王淑蓉中国国家教育委員会高教司代表、王福祥北京外国語大学学長などの方々である。

まず、北京日本学研究中心の徐一平副主任、北京大学現代日本研究コースの田万蒼主任からこの1年間の運営報告がなされ、続いて基金の専派派遣計画、センター派遣の博士課程学生の課程修了・帰国の問題、中国側教師・研究者の研究レベルを高める問題、センターの図書資料部の建設、北京大学現代日本研究コースの諸問題、中日両方教師配置の将来計画などをめぐって中日双方が意見を交換した。

◇11月3日(金)：第11期生の第2次中間発表がコース別に分かれて、それぞれ開催された。

◇11月4日(土)派遣教授の天津旅行：当センターの派遣教授及び家族16人が自費の日帰り旅行として、天津を見学に行った。天津の「古文化街」を散策したあと、40分の「強行軍」で天津食品街にたどり着き、昼食に「狗不理包子」を満喫した。

◇11月7日(火)：客員研究員の中間発表が、組別に分かれて行われ、派遣教授、学生などが多数参加した。

午後：来年の12期生の推薦候補者二人(北京外国語大学日本語学部出身)に対し、面接を行った。

◇11月10日(金)午前10:00-11:30：今学期第1回目の文学・文化研究会が開催された。雫雪艶さんが「『池上篇』から『池亭記』『方丈記』まで—その思想的特徴をめぐって—」と題するテーマで発表した。派遣教授、客員研究員、センター助手など多数参加し、熱烈に議論した。

◇11月12日(日)：センター主催の秋の日帰り旅行として、北京郊外の昌平県南口镇にある「老北京微縮景園」への見学を組織した。派遣教授と家族16人がそれに参加した。全員が一時間半にわたって、景園を巡り、北京の歴史・風俗について興味深く見物した。

◇11月16日(木)午後3：00-5：00：今学期最初の市民講演が基金北京事務室ホールにて開催され、平川祐弘先生が「古代中国から近代西洋へ—幕末維新における文明モデルの転換」というタイトルで、約二時間興味深く講演され、好評を博した。

◇11月23日（木）午前9：00-11：00：平川祐弘先生が中日関係史学会の招請で出張講演に北京市政協礼堂に赴き、「明治日本における国家モデルの転換」という題目で講演をされ、中国の学者と熱烈な議論と意見交換をした。

国家教育委員会韋鈺副主任在“北京日本学研究中心”成立十周年国際研討会開幕式上の講話

尊敬的佐藤大使閣下：

尊敬的日本國際交流基金草場理事：

各位來賓、朋友們、同志們：

今天，我們懷着十分喜悅的心情在這里共同慶祝“北京日本学研究中心”成立十周年。首先，我代表中国国家教育委員會對“中心”十年來取得的成績表示熱烈的祝賀，對中日雙方多年來為“中心”的創立和發展作出積極貢獻、給予大力支持和付出辛勤勞働的各界人士表示衷心的感謝。

在中國國家教育委員會和日本國際交流基金的共同商定下，一九八五年設立了“北京日本学研究中心”。由於中日雙方的共同努力，“中心”的事業不斷發展並取得了非常顯著的成就。十年來，先後有340多人次日方專家、學者來“中心”任教、工作，在中日雙方教師們的辛勤工作下，共培養了近200名碩士研究生；培訓了近300名日語教師和100多名經濟、企業管理骨幹人材。外，還有100多名客座教授和客座研究員在“中心”從事研究和工作。目前，“北京日本学研究中心”不僅已成為我國日本學研究的基地，而且也成為中日文化交流的一個中心。“中心”十年來的工作和成就促進了中日兩國友好交流，增進了中日兩國教育界人士的相互理解。

在中日雙方良好合作的基礎上，今年六月，中國國家教育委員會和日本國國際交流基金又簽署了關於“北京日本学研究中心”的下一個五年計畫。我相信，在中日雙方各界有關人士的大力支持和關心，在“中心”工作人員的繼續努力下，“中心”的工作必將得到進一步的發展。

中日兩國人民有着兩千多年的友好交往的歷史。特別是中日建交以來，兩國友好關係得到了全面發展，經濟貿易和技術合作教育文化交流的規模不斷擴大，兩國人民的相互理解日益加深。中日友好關係發展到今天，來之不易。這是雙方多年來共同努力的結果。長期以來，中日友好人士為此做了大量工作，作出了重要的貢獻。保持中日長期和平友好，不僅符合兩國人民的根本利益，也是維護亞洲和世界和平與穩定的需要。二十一世紀即將到來，中國人民正在為實現我國國民經濟和社會發展的跨世紀藍圖——“九五”計畫和2010年遠景目標而努力。教育和科學技術的發展是實現這一宏偉目標的基本保證。中國的改革開放的政策不會改變，我們的國際教育交流與合作的政策將繼續下去。我希望中日兩國的教育工作者繼續加強交流與合作，相互學習和借鑒對方好的作法和成功的經驗、為發展兩國的友好關係，為中日教育事業作出貢獻。

最後，預祝“中心”成立十周年、國際學術研討會取得圓滿成功。

北京日本学研究センター10周年記念シンポジウム 在北京日本大使館佐藤嘉恭大使ご挨拶

中国国家教育委員会副主任	韋鈺女士
21世紀委員会中国側首席委員	張香山先生
中日友好協会会長	孫平化先生
北京日本学研究センター主任教授	嚴安生先生、竹内実先生

本日ここに、「北京日本学研究中心10周年記念シンポジウム」が開催されるに当たり、まずはセンター設立10周年を心からお祝い申し上げます。この10年間にわたり、センターが日中関係強化に果たされた役割は極めて大であります。これらの関係者のご努力に対し、心から敬意を表します。

北京日本学研究中心は、故大平総理が提唱された日本語教師の養成を目的としたいわゆる「大平学校」の後を受け、日本語教師の養成に加え、日本研究を行うことを目的として、1985年に開設されました。

本センターは以後、二次にわたる5カ年計画の下に、日中双方から優秀な教授陣を得て、修士課程、さらには博士課程レベルの研究コースが設置され、まさに中国における日本語・日本語研究の重要な中心としての地位を占めるに至っております。本年から第三次5カ年計画の下、さらに多彩な活動が21世紀へ向けて企画されております。私共と致しましてはこれらの計画が支障なく実現されて行くように強く支援してまいり所存であります。

さて、このセンターが設立されて以来のこの10年間に、あるいは、「大平学校」開設から言えば、この15年間に、世界は大きく変化しました。特に、1990年前後に国際情勢は激変しました。その一つ一つをここで説明する必要はないと思いますが、その激変の中で、経済発展を背景にしたアジア太平洋地域の台頭が域内諸国の協力と協調によってもたらされています。中国と日本がこのような冷戦後の発展の中で重要な役割を果たしていることは、疑うまでもありません。そして中国も日本もそれぞれが、この地域の協力・発展に積極的な役割を果たすことを認めあっているのです。国交正常化の際の「日中共同声明」と「日中平和友好条約」に基づく両国関係は、正しく「新しい発展段階」に入りつつあると言えましょう。さる5月に中国を訪問された際、村山総理は、「未来志向の日中関係」を打ち出されました。村山総理はまた、さる8月15日、遠くない過去の一時期の侵略につき、痛切な反省とお詫びの気持ちを表明し、国際協調による平和と民主主義に向けての決意と誓いを表明しました。アジアが、さらには世界が新たな国際秩序を構築しようとするとき、日本と中国も双方の努力により両国関係の「新しい段階」を求めていかざるを得ません。そして、この「新しい段階」を支える要素はこのセンターの活動も含めた広義の文化交流であり、そこから生まれる相互理解であろうと思っております。現に最近の歴史家は国際関係の文化的局面に関心をもつようになっている、と伺っております。国家関係は政治、経済、安全保障などいろいろな角度から見ることはできますが、学術交流、留学生交流、語学習得、芸術交流、記者交流、文化的行事の交流等、凡そ人間の活動と言われるものの交流が、国家関係を生産的にしていく要素として、これからの国際関係ではますます重きをなしていくものと観察されます。情報伝達技術の日進月歩により世界の出来事が瞬時にして各地に伝達される現代においては、それぞれの歴史、伝統、習慣、経験等についての相互理解が正しくなされなければ、国際関係は円満に発展しません。相互依存性のますます深まっていく現代社会においては、国家関係の文化的局面は極めて重要と言わなければなりません。一衣帯水の関係にある日本と中国にとってはこの点は殊のほか重要であり、両国政府は相互理解の絆を強くする外交を、試練に耐え得るものにする確信します。北京日本学研究中心のお仕事はまさにこれからの日中関係の基礎をなすものであります。1979年の大平総理の提言がこのような日中関係の将来を展望したものであったとすれば、その政治的洞察力に感銘し、日中双方が官民上げて、このセンターの活動を一層支援し、この事業のますますの重要性を広く訴えていかなければならないと、改めて思う次第であります。

今回のシンポジウムは、「世界における日本学、中国における日本学」を統一テーマとして、日中双方とともに、欧米の著名な研究者の方々のご参加を得て、言語、文学、社会、文化の各方面に

わたり話し合われると伺っております。このようなシンポジウムを通じ、日本に関する研究の現状を幅広い視野からとらえ、今後の展望を見定めることは、中国ひいては世界の日本研究にとって大きな意義を有するものであり、また、戦後50年のこの機会に、我々日本人が、自己を改めて認識する絶好の機会でもあります。今回のシンポジウムが大きな成果を収められ、日中間の友好協力関係の増進に寄与されることを期待しております。

最後になりましたが、主催者である北京日本学研究中心、また中国国家教育委員会、国際交流基金の関係者の皆様方のご尽力に敬意を表するとともに、今回のシンポジウムの成功を祈念し、今後、日中関係がますます強固なものとなることを確信して、わたしのお祝いの言葉とさせていただきます。

21世紀委員会中方首席委員張香山先生の致辭

尊敬的日本大使佐藤先生

尊敬的各位日本朋友

尊敬的教委副主任韋鈺同志

北京外国語大学校長王福祥同志

各位同志：

今年是北京日本学研究中心成立十周年，我有幸参加北京日本学研究中心十周年紀念研討会的開幕式，感到十分高興。請允許我代表中国国際交流協會向北京日本学研究中心以及為紀念北京日本学研究中心而举行的国際研討会表示熱烈的祝賀。

北京日本学研究中心自成立以來為共同創建中国的日本学作出了自己的重大貢獻。這主要是培養了從事日本学科研与教学人材、發表了具有一定水平的研究日本学若干領域的學術論文，逐步促進和擴大了国内的以及中日之間的有關日本学方面的交流。在不長的時間內，作到這些是難能可貴的。今年的研討会今天開幕了，研討会的主题是世界的日本学与中国的日本学，我認為這是很有意義的主题。我熱切希望通過會議的討論，能進一步明確中国日本学的涵義，確定作為完整的系統的日本学的研究領域，特別是根據中国的實際和需要，并參照外國的經驗，就如何使中国的日本学具有自己的特色的問題提出寶貴的見解。我想做到這些將有助於中国日本学的進一步發展，從而爭取在不久的將來使之在世界日本学中居于應有的地位。

我還要提到的一點是，希望我国的学者在研究日本学時不要把它作為學術的問題，還應該見到這是同實現中日世代友好這項基本國策相聯係，同我国的改革開放、經濟發展的需要相聯係，甚至還同今後世界的走向這個問題相聯係的政治性的大問題。從這樣的見地出發，中国的日本学就会重視聯係實際，更賦有現實意義。

以上這些看法是否妥當，歡迎与会的学者們指正。

最後，我衷心地預祝研討会完滿地成功。

北京日本学研究中心設立十周年 紀念シンポジウム開会式 日本国際交流基金 草場宗春理事挨拶

尊敬する中国国家教育委員会副主任 韋鈺先生、中日21世紀委員会首席代表 張香山先生、中日友好協會會長 孫平化先生、在中國日本国特命全權大使 佐藤嘉恭閣下、北京日本学研究中心—實施委員会委員長及び北京外国語大学学長 王福祥先生、並びにご列席の皆様、ただ今ご紹介に

あずかりました国際交流基金の草場宗春でございます。本日は、北京日本学研究中心設立10周年記念シンポジウムの開会式に国際交流基金の代表として出席できましたことを、喜ばしくもまた光栄に存じます。

北京日本学研究中心は、国際交流基金と中国側国家教育委員会の共同事業として、1985年9月に当時の北京外国語学院に設立されました。本センターは故大平正芳首相の提唱で1980年に北京語言学院に設立された日本語研修センター（通称大平学校）が実施していた中国人日本語教師への研修事業を継続する一方、新たに人文系の日本学研究4専攻を備えた大学院修士課程を開設いたしました。以後10年間二度にわたる5カ年計画を実施し、これまでに修士号取得者137名を輩出し、また中国人日本語教師297名に対する研修を行いました。日本語教師への研修は大平学校時代の600名と合わせると、約900名にのぼります。また、1991年から、センターの修士号取得者の中から毎年4名が選抜され、博士課程の国費留学生として4年間の訪日研究を行うプログラムが開始されました。本プログラムにより現在15名のセンター卒業生が日本の大学の博士課程に進学し、来年には最初の学位論文提出者が出るのが期待されております。これらの人々は中国の日本研究と日本語教育の第一線で活躍する一方、日中交流の懸け橋として両国の相互理解の一翼を担っております。

センターの創設期のことは、この後の特別講演で源了圓先生がお話しされると伺っておりますので、私からは詳しいことは申し上げませんが、センターが今日の隆盛に至ったのは、中国の地に日本研究と日本語教育の拠点を築こうという、日中双方の多くの関係者の方々の偉大な情熱と甚大なご努力の賜物であります。設立以来、一貫してセンターの運営をご指導された王福祥先生、初代主任李徳先生、そして現主任厳安生先生を初めとする中国側の方々のご尽力につきましては、改めてそのご功績を讃えるとともに、深甚の感謝の念を表明する次第です。日本側でも、先学期までに延べで258名の派遣教授がセンターの教壇に立たれ、また大学院生の訪日研究に際しては、延べで198名の受け入れ教授が論文作成の指導に当たられました。特に、源先生を会長とする協力委員の方々、センターの研究と教育の理念と形式を定めるのに中心的な役割を果たされるなど多大の貢献をされました。

以上のように、北京日本学研究中心事業の特徴は、計画の策定から教育、研究、さらには組織運営に至る一切のプロセスが、完全に日中双方の共同でなされているという点にあります。この共同作業を通じ、センターは研究、教育の振興のみならず、関係者及び日中両国間の信頼と友情の増進に貢献してきたと申せます。

これまでの10年間でセンターは磐石の基礎を築き上げ、今や中国における日本研究と日本語教育の一大拠点となろうとしています。中国各地から多くの英才がセンターに集まること、あたかも李白が「群才属休明、乘運共躍鱗」（「群才休明に属し、運に乗じて共に鱗を躍らす」）とうたったごとくです。本シンポジウムが契機となり、21世紀に向けてセンターが一層の発展を致しますことを祈念して私の挨拶を結ばさせていただきます。ご清聴ありがとうございます。

北京外国語大学王福祥校長的開幕辞

各位来賓、各代表：

在北京日本学研究中心十周年記念国際研討会召開之際，我僅代表北京外国語大学、北京日本学研究中心實施委員會，對大會的召開表示熱烈的祝賀。對在百忙之中不遠萬里專程惠臨北京，參加本次研討會的中國、日本和外國的日本學專家、各位代表表示熱烈的歡迎和衷心的感謝。對本次研討會給予支持和贊助的中日友好協會、中華日本學會、中國中日關係史學會、日本駐中國大使館、日本精

工手表、日本航空公司、日本福武書店有関単位表示由衷の感謝。

今年是北京日本学研究中心成立十周年大慶之際、今天、在這秋高气爽的金秋之際、又迎来了“中心”的十周年記念國際研討会、看到在座的這麼多前来参加本次研討会的国内外日本学專家和学者、我感到由衷的高興我喜悦。

日研中心是国家教委和日本國際交流基金為促進兩国的教育文化交流而共同創建的教学与科研機構、成立十年来、日本國際交流基金前後从日本各大学聘任345名專家到日本学研究中心任教、在教学方面已經培養了219名碩士卒業生、培訓了297名大学日語教師進修班學員、選送了20名碩士卒業生赴日攻讀博士課程。在學術研究方面、迄今為止“中心”已經聘請了10人次的客座教授和90人次的客座研究員、成立了語言文学和社会文化兩個研究室、每年還出版“日本学研究”和“日本学論叢”等學術刊物、并推出了『中国日本学年鑑』、『日本語研究』、『中国日本学文献総目録』等學術專著和参考書目。除此以外還舉辦中日日本学研討会和各種專題的公開講座、十年間已成功舉辦了6次大型國際學術研討会。通過這些活動提高了大学日語教学和中国日本学研究的水平、促進了中日兩国的學術交流和友誼。

在中日知名人士的關懷下、“中心”的圖書資料館亦逐步完善和發展、日文圖書大都是日本國際交流基金贈予的、部分中文圖書是北京外國語大学購買的。十年来、還得到了中日友好人士的關注、先後建立了“高崎文庫”和“孫平化文庫”。“中心”的圖書資料館已日益成為全國日語界和日本語研究各界人士的圖書資料中心。

日研中心巨大成績的取得離不開国家教委、日本國際交流基金、日本駐華使館、日本派遣的專家、有関單位和友好人士以及在座各位的扶持和幫助、在此我代表北京日本学研究中心对大家表示深深的謝意。

参加本次研討会的人士、既有对“中心”創建作出巨大貢獻的元老、“中心”歷屆的主任教授和專家的代表、也有在日本学研究方面的中外学者、除了特別講演、分科会的發表外、本次研討会還設置了專家專題討論、負責人圓卓會議等項目、希望国内外学者、同仁充分發表自己的意見、共同探討今後的日本学研究在中国的發展、使這次研討会成為各位學習和交流的場所、把會議開得充實、熱烈。最後衷心祝願北京日本学研究中心十周年記念國際研討会取得圓滿成功！

10周年シンポジウムを終えて

山口 敏幸

大平学校を引き継ぎ、發展させる形で日本学研究センターが創設されたのは1985年。それからちょうど10年を終えた今年、10月9日から13日までの5日間、10周年記念シンポジウムが北京外國語大学に新しく建てられたアラビアセンターで盛大に開催された。

今回のシンポジウムは記念行事にふさわしく、「世界における日本学と中国における日本学」という大きなテーマを掲げ、その内容も規模も例年行われている中日シンポジウムを大きく上回るものであった。

シンポジウムの開幕の式典には、中日21世紀委員会中国側首席代表の張香山先生、中日友好協会の孫平化会長、そして日本国大使館の佐藤大使など「大物」来賓が列席し、続いて行われた特別講演では、日本から源了圓教授、米国からジェー・ルビン教授に違った角度から、テーマにふさわしいお話をいただいた。さらに、センターの卒業生を含む中国の若手日本研究者を中心とした分科会、それを受けた形で、日本と中国から招いた8名の著名研究者によるパネル・ディスカッションが行われ、それぞれの立場から大変魅力的な発表がなされ、参加者の興味をそそった。そして、今回のシンポジウムで画期的だったのは、最終日に中国各地にある日本研究機関の代表17名の参加を得て円卓會議が開かれたことである。會議での活発な討論を通じて、中国における日本学研究的

現状に対する認識が深まると共に、今後の展望及び課題が明らかになった。また、これまで欠けていた研究機関相互の連携の重要性が指摘され、将来に向けたネットワーク作りが強調されたことは得がたい収穫であった。

こうして、10周年記念シンポジウムは大きな成果を収め、頤和園での開幕レセプションを迎えることができた。最後の最後にバスの追突事故という「おまけ」も付いたが、このハプニングでシンポジウムの評価が変わるものではない。

今回のシンポジウムの成功をバネに、日本学研究センターが今後中国における日本学研究的文字通り「中心」として、指導的役割を果たして行くことを期待して止まない。

以上、10周年記念活動準備委員会日本側委員長としての公的な感想を述べたが、最後に個人的感想を少し：

今回のシンポジウムで一番評価したいこと：それは、末金文氏をはじめとする教職員、学生の、いわゆる「裏方さん」の活躍。表舞台の偉い先生方が安心して仕事ができる環境を作り上げたことは、シンポジウム成功の最大の要因だったと思う。

今回のシンポジウムで一番面白くしかも感服したこと：それは、平川先生の基調報告。平川先生のかかなり意識した挑発的な発表は大変面白く、しかもテーマを押さえたいうで議論の活性化をねらったパネリストとしての姿勢に感服した。

今回のシンポジウムで一番残念だったこと：それは、準備段階で幾つか提案されていた、シンポジウム本体をサポートする多少柔らかな企画、例えば、大衆芸能の公演などの企画が諸々の事情で消えて行ったこと（唯一、茶道の実演だけが生き残り、当日は盛況だったそうである）。学術シンポジウムである限り、あまりふざけたお祭り騒ぎは慎むべきだが、学外に門戸を開き、一般の人にも気軽に参加してもらい、いくらかでも日本学に対する理解を深めてもらうためには、多少客寄せパンダ的ではあるにしても、こうした企画の必要性も十分あると敢えて主張したい。

ともかく、今回のシンポジウムは私個人にとっても大変刺激的で、有意義なシンポジウムであった。

新任専門家自己紹介

駿河輝和（するが・てるかず）：高知県高知市生まれ。島根、三重、兵庫、京都に住み、現在大阪府和泉市居住。妻はシステム・エンジニアでメカに強く、家庭での機械関係、修理等はすべて任せている。小学校6年と3年の娘あり。専門は、理論経済学、労働経済学、応用計量経済学。経済環境が変化したとき雇用や賃金がどのように変化するかの実証的分析が最近の研究テーマ。地域研究としてオーストラリアの移民や労働市場の論文も書いている。中国は旅行できたこともなく、初めての訪問。この機会に地域研究の分野を環太平洋に広げる予定。春より50肩に悩み、北京に来て何とかテニスができるようになった。テニス、自転車それに痩せる石鹸を使用しているので、減量して帰国できそうである。

稲村哲也（いなむら・てつや）：静岡県長泉町生まれ。学生時代、メキシコ2年間留学し、大学院博士課程でもペルーに2年余り滞在してアンデス高地の先住民（リャマ、アルパカを飼う牧畜民）の調査を行った。結局東大に13年間在籍したことになる。卒業後は、愛知県にある野外民族博物館に勤務し、博物館開設とネパールの仏教（ラマ教）寺院復元などに従事。それをきっかけとして、ネパールの山岳民シェルパ族（ヤク牧畜）の現地調査にも従事し一昨年から、外モンゴルでも調査を始めた。専門は文化人類学で、現在の主なテーマは牧畜文化の比較研究。中国へは家族（妻、二歳の娘）と一緒に来て、来年7月まで滞在するので、中国の漢文化はもちろん、少数民族文化についてもできるだけ知りたいと思って

いる。

笠谷和比谷（かさや・かずひこ）：1949年、神戸市生まれ。京都大学の文学部史学科で国史学を専攻したのち、現在は京都桂の地にある国際日本文化研究センター（通称、日文研ニチブンケン）の研究部に所属。専門分野は武家政治史、特に徳川時代の武家社会の政治構造や武士のイエの歴史であるが、勤め先の日文研は、各種分野の研究者や海外の研究者を交えて学際研究、国際研究を行うための研究機関であることから、この共同研究においては本来の歴史学の枠を超えて、現代日本社会の政治のあり方や組織の秩序を、日本の伝統的なイエの仕組みや武家の組織との応答関係の中で分析する仕事を進めている。殊に日本社会におけるリーダーシップの意味や組織と個人との関係を問題としている。今回、中国にきた機会に、中国の親族組織や政治構造と、日本のそれとの比較分析のための手掛かりが得られればと願っています。

三谷 博（みに・ひろし）：1950年、広島県福山市生まれ。東京大学文学部国史学科を卒業。学習院女子短期大学をへて、現在、東京大学教養学部勤務。大学院の所属は地域文化研究専攻のアジア太平洋部門。専門は19世紀の政治・社会史。元は明治時代の高等教育と社会移動の関係を研究していたが、その後、時代をさかのぼり、明治維新の内政、19世紀前半の外交政策、さらに徳川時代全般の外交思想を考えるようになった。大学院の演習で中国・韓国・アメリカなどの留学生に接し、またインドに滞在した経験から、比較史にも興味をもつようになり、日本を内と外から見つめることによって、他の国や地域の理解も可能となるようなコンセプトやモデルを作り出したいと願っている。

学生たちとの食事

平川 祐弘

日本も豊かになるにつれて西洋人との心理的距離が縮まる交際が気楽になった。中国も外幣を廃して人民幣に統一したことで外資と中国人民との間が近づいた。以前は服務規定のためか、専ら食堂の小姐が自分の家族のことをわたしたちに語るような親しさを見せることはなかった。それが今回は「很親切」といわれた。

専らの方でも大学近辺の中国料理店に入って気軽に食事する人が増えた。料理もうまくなり、かつ衛生的と信じる人が増えたからであろう。九二年に来た時と違って九五年は学生達と何度も一緒に食事了。学生達がお別れに先生を食事に招くと申し出された時は嬉しかったが、学生に奢られては恐縮だから代金は私どもが払った。しかし学生が食堂側に何か話したと見えて代金は大変安かった。そして何よりも楽しかったのは食卓でいろいろ会話がはずんだことだ。教室ではいわれないことや言えないことも食卓では聞くことができる。北京に来て何が興味深いかと言って中国の若いエリートたちの本心を聞くことが一番である。この地球上で中国人だけは他の地域とは著しく異なる情報空間や教育空間の中で育って来た。その若者が日本人という異人と接触してどのように反応するか。中には新しいイデオロギーの衣をまとった中華思想を是として攘夷派となる青年もいるだろう。洋務派となる女性もいるに相違ない。訪日して彼らはどのように変わるだろうか。わずか半年の留学では友達も簡単にはできるまい。「遊びにくるように」と言ってわたしたち夫婦は平川家の地図を渡して、東京での再会を約して学生達と別れた。——わたしは東大生だったころフランス人教授にしばしば食事に招かれた。その恩を私はいま別の国々の学生に向けて返しているような気がする。